1940年に竹島で撮影された8ミリフィルムの検討

井上 貴央
（鳥取大学名誉教授）

はじめに
1　8ミリ映画の由来と経緯
2　映画のカット一覧と映像の検証
3　撮影地点と調査隊の行動
4　もう一つの8ミリフィルム
5　リン鉱石探査の専門家
おわりに

はじめに

戦前の竹島を撮影した8ミリ映画はかねてから知られていたが、1992年になってニホンアシカの動く映像が確認された。これを機に「ニホンアシカ展」が開催され、剥製標本や『中渡瀬アルバム』などの発見が相次いだ[1]。

この映画は竹島のリン鉱石調査にともなって撮影されたもので、「日本海のアシカ狩」というタイトルが付いている。ニホンアシカの生物学的側面のみならず、竹島での調査活動の一端を知るうえでも貴重な映像である。しかし、フィルムを所蔵する米子市立図書館では、戦後の映像が混じっているなどの指摘を受けて2013年4月から閲覧を中止し、所蔵リストからも外している。

本稿は、この映像を再検討し、その結果を報告するものである。戦後の映像が選別できたばかりでなく、大部分の撮影場所を特定することができ、調査隊の行程・行動を知ることができた。また、筆者が竹島と判定したアシカの遊泳シーンが[2]、天王寺動物園であったことが判明したので新たな根拠を示して訂正したい。なお、島内の地名の一部は慶尚北道刊（2008）『独島叢書』を参考にし、岩礁については番号を付した[3]。

1　井上貴央・中村一恵・伊藤徹魯「よみがえれ、ニホンアシカ」『アニマ』246号（1993年）44－48ページ。

1　8ミリ映画の由来と経緯

この映画は、戦前に写真愛好家の長田芳久氏（以下、芳久氏と略）が撮影したものであるが、詳細な記録は残っていない。

1954（昭和29）年に開催の「竹島説明展」（米子市立山陰歴史館：1月20日～3月20日）に先立ち座談会が開催された。芳久氏はこのなかで、「1938（昭和13）年6月三井物産が肥料の探索を行った際、登山・科学知識・写真技術のある者を募集し、その一員として竹島へ行った。たくさん写真を撮って帰り優秀なものは三井に渡し、一部を手元に保存している（当日映写）。アザラシを生け捕ったほか、島に洞窟があったり思い出が多い」と述べている[4]。「当日映写」とあるので、芳久氏編集の映画が上映されたものと思われる。

1975年の春、朝日新聞大阪本社から米子支局に戻った堀江顕三氏は、芳久氏からこの映画の存在を知らされ[5]、朝日放送で放映することを考えた。放送関係者に宛てたメモには、「読や毎のTVが飛行機をとばしたというので、それならと頼んでみました」とあり、77年2月に読売や毎日の系列会社が竹島を空撮する中で[6]、朝日系列も竹島の話題として取り上げるよう要請したようだ。メモには「S13.6.12境港出発・隠岐西郷1泊、6.13隠岐出発、6.14竹島上陸・即日帰路へ」とあり、撮影年は昭和13年となっていた。

まもなく、朝日放送はこの映画をビデオ映像に録画して放映し（「1977朝日ビデオ映像」と呼ぶ）、堀江氏は記事にした[7]。その概要は次の通りだが、

2　井上貴央「竹島アシカ猟　写真の真実（下）アシカが写る8ミリ映画」山陰中央新報2021年8月29日。
3　本稿で用いた地名を図10に示した。国土地理院の地図での名称や位置と異なるものがある。
4　産業経済新聞1954年1月16日「時の焦点竹島―座談会から―」。アザラシはアシカの間違いである。
5　堀江顕三「メモ帳から 竹島また竹島」『赤い水筒』（1999年）167－170ページ。
6　1977年2月8日には読売新聞（西部）が、同月19日にはRKB毎日（山陰放送との共同取材）が飛行機で竹島を空撮している。
7　朝日新聞（大阪）山陰北陸〔鳥取〕版1977年4月16日「昭和15年に鉱石調査 今も残る

撮影年は1940（昭和15）年に変更されていた。

・昭和15年に国から三井物産に、竹島のウミネコの糞のリン鉱石を肥料に利用できないか相談があった。米子市の三井物産駐在社員から、カメラ好きの芳久氏に声がかかった。
・20歳代だった芳久氏は、昭和15年6月14日、隠岐の西郷港経由で出発した。船は75トンの幸運丸だった[8]。
・「島根県穏地郡五箇村」と書かれた標柱が立っていた。
・作業小屋にはワカメが積んであり、浅瀬にはアワビがびっしりついていた。
・西島と東島の間の浅瀬では岩が動いたのでびっくりしたが、大きなオスアシカのボスだった。ヘソの緒のついた赤ちゃんアシカや隊員に向かって来るアシカがいた。
・島の上からは魚の群れがよく見え、スルメイカの宝庫でもあった。
・フィルムは米子市の憲兵分隊で現像され、少ししてから返してもらった。自分でフィルムを編集したが標柱の場面は残っていない。
・掲載写真：①芳久氏の顔写真、②東島に着いた幸運丸、③伝馬船で島に上陸する一行、④竹島近くの海面から顔を出すアシカの群れ。

それからまもなく新聞報道を見て調査に同行した人物が名乗り出て、別のフィルムがあることが判明した[9]。その記事の概要は次の通りである。

・同行したのは松江市の内田石雄氏（67歳。元三井物産米子出張所員）
・三井物産米子出張所所長の西村英喜氏（79歳）から8ミリ撮影機を託されて撮影した。大切に保管していたが長い年月がたち忘れていた。新聞記事を読んで思い出した。
・竹島の標柱のほか、作業小屋が三棟写っていた。芳久氏のところで写してみたら、「島根県穏地郡五箇村」と記された標柱が写っていた。

その時の8ミリ―朝日テレビ 大阪で放映」。
8　『日本船名録 昭和15年度』や『昭和12年版 動力附漁船々名録』では確認できない。
9　朝日新聞（大阪）山陰北陸版1977年6月7日「別の探検隊員も撮影 朝日新聞記事読み思い出す」。

・内田氏は船内にいたので、島の様子は芳久氏の方が詳しい。
・掲載写真：①内田・西村両氏の写真、②内田氏が撮影した白い竹島標識と三棟の作業小屋[10]。

1990年7月に堀江氏は米子市立図書館長に就任。その翌年に筆者はこの映画の存在を知らされたが、フィルムの傷みが激しく写すことはできなかった。そこで、堀江氏は医療法人理事長の長田昭夫先生に相談。米子小型映画の会の方々とともにフィルムを修復し、ビデオに収録していただいた（「1992長田ビデオ映像」と呼ぶ）。

修復された映像には動くアシカの映像が写っていた。そして、92年6月30日には日本海テレビとNHKが夕方のローカルニュースで、翌7月1日にはテレビ朝日の系列ネットニュースで放映され、同日の山陰中央新報で報じられた。筆者は、10月3日に日本哺乳類学会1992年度大会（帯広）で、「昭和15年撮影の竹島のニホンアシカの8ミリフィルム」と題して発表した。

フィルムは、芳久氏のご子息の長田孝道氏のご厚意で米子市立図書館に寄贈され、そのビデオ映像が図書館で公開されていた。また、堀江館長のご配慮で、研究や啓発活動に用いる場合に限り、複製の配布について了解いただいた。

やがて、この8ミリ映画は韓国のマスコミが注目するところとなり、筆者も何回か取材を受けたが映像の提供は断った。韓国の研究者からも希望があったが、館長と相談の結果、提供しなかった。99年3月に堀江館長は退職された。

2011年10月、韓国KBSニュースは「1940年に日帝が独島アシカを無差別乱獲した映像原本を米子市立図書館から入手」と伝えた。そのなかで、同図書館の大野秀総括司書は「この8ミリフィルムの原本は今回韓国メディアに初めて公開されるものです」と話している。この映像は無差別乱獲ではない。映像の提供はその時の館長の判断であったのだろうが、事実を曲げて放映されることは予想できたことであり、残念な結果になった。

10　写真説明の「コンブ採取」は、「ワカメ採取」の誤りである。

2013 年 2 月には長田先生によってフィルムは DVD 化され、より鮮明な映像が見えるようになった（「2013 長田 DVD 映像」と呼ぶ）。DVD は米子市立図書館に寄託されるとともに、竹島問題の研究に役立つようにと島根県竹島資料室にも寄贈された。新聞は島根県総務課の話として、「研究者を交えて詳しく分析し、貴重な映像資料の活用を検討したい」と伝えているが[11]、その後、分析・活用された話は聞かない。

筆者は日本動物学会米子大会でニホンアシカの講演を依頼されたのを契機に、2021 年 5 月に久しぶりに米子市立図書館を訪ねたところ、このフィルム映像は外部からの指摘を受けて閲覧が中止となり、図書館の所蔵リストからも削除されたことを知った。

2021 年 6 月に隠岐を訪れたとき、斎藤一志氏と偶然初めて出会った。隠岐の文化や歴史に詳しく、カメラマンの仕事もしているが、以前にこの映像を見たことがあったという。戦後映像の混入、船の向かう方向、アシカの遊泳シーンなど数々の問題を指摘された。

同年 7 月から 8 月にかけて、筆者は竹島でのアシカ猟の映像に関する連載記事を執筆し、この映像も含めて写真の検証をおこなった[12]。

2　映画のカット一覧と映像の検証

映像の詳細な検討のため、「2013 長田 DVD 映像」を動画編集ソフトの Final Cut Pro X（Apple 社）に取り込んで解析した。映画のカット一覧を表 1 に示す。以下、カット番号は「C ○」と表記する。

（1）撮影機材

撮影装置を調べると、8 ミリカメラはシネコダックエイト（Ciné Kodak Eight）60 型、スチールカメラは㈱小西六･六桜社の手持式地上写真機（カビネ）と考えられた（C4, 63、図 1-1,2）。この 8 ミリカメラはゼンマイ駆動式で、最大連続撮影時間は 25 秒、W8 方式と呼ばれる 25 フィートのフィルムの片面撮影時間は約 2 分である。また、標準レンズは 13 ㎜だが、38 ㎜の望遠レンズに交換すると約 3 倍の像が得られるという[13]。

11　山陰中央新報 2013 年 2 月 28 日「竹島映像島根県に提供へ」。
12　井上貴央「竹島アシカ猟 写真の真実（上･中･下）」山陰中央新報 2021 年 7 月 2 日、29 日、8 月 29 日。
13　吉川速男『8 ミリの第一歩』玄光社（1934 年）51 － 52 ページ。

図 1　撮影機材（矢印）の推定。枠内は実機。1：8 ミリカメラはシネコダックエイト 60 型。2：スチールカメラは小西六・六桜社の手持式地上写真機（カビネ）。

（2）オープニングクレジット

「1977 朝日ビデオ映像」には冒頭に「国債をかいませう」のクレジットがあり、軍用機と軍艦のイラストが入っている（図 2-1）。修復後の映像では、「8 ミリ文化映画」から始まり、「日本海のアシカ狩」、「後援 東京三井物産本社」、「撮影・長田芳久」と続く（図 2-2,3,4,5）。

図 2　8 ミリ映画のオープニングクレジット。
1：「国債をかいませう」の背景に 2 機の軍用機と軍艦のイラストが見える。
2：N.G.T.FILM「8 ミリ文化映画」。N.G.T. はナガタの略で、FILM の文字はダイヤモンド形に配置されている。
3：「日本海のアシカ狩」。
4：「後援　東京三井物産本社」。
5：「撮影・長田芳久」、カメラと三脚のイラストが入っている。

（3）朝の境港出港

境港で乗船したのは第二隠岐丸で、日影の様子から朝の出発便である（図 3-1）。当時、本土と隠岐間には二航路があり、隠岐丸と第二隠岐